

カンカル・ツルティム・ケサン著

『学者の王のお言葉の正しき伝統——一千万の智者の源という叢書』

カンカル・ツルティム・ケサン氏の全集 (mkhas dbang gsung gi rgyun bzang blo gsal bye bai

byung gnas zhes bya bai dpe bstar, khang dkar tshul khrius skal bzang mchog gi gsung 'bum)』 全十巻

福田 洋 一

本学名誉教授ツルティム・ケサン先生は、日本のチベット学、とりわけ関西のチベット学を牽引してきたチベット人研究者であり、日本でただ一人のチベット人大学教授として、本学において長く教鞭を執つてこられた。ツルティム・ケサン先生にチベット語の教授を受けた研究者は数多いが、それだけに留まらず、学生や一般のチベット仏教学習者、あるいはチベットからの留学生や研究者など幅広い人たちにチベット語やチベット仏教を教えてこられた。それだけではなく、ツォンカバを中心としたゲルク派の基本文献を数多く和訳して刊行し、広く日本のチベット仏教あるいはインド仏教の研究者に裨益してきた。その功績に対して、二〇〇五年には日本印度学仏教学会の推薦を受けて鈴木学術財団特別賞が授与された。この特別賞は、ツルティム・ケサン先生と日本人研究者の共訳による『ツォンカバ中観哲学の研究』Ⅰ～Ⅴ、文栄堂書店（一九九六―二〇〇三年）が対象とされたが、後述するようにツルティム先生のチベット仏教文献の訳注は、これら以外にも多数のものが上梓されており、そういった活動に対する日本の仏教学界からの賞讃と⁽¹⁾言える。

一方、日本の学界ではあまり知られていないが、ツルティム先生はチベット語でも多くの著書を發表してこられた。これらは、日本語の書籍と異なり、通常の出版の流通に乗らず、軽装の製本で、多くは「日藏仏教文化叢書」として京都の西藏仏教文化協会から刊行されてきた。おそらく出版費用は寄付に頼り、寄贈によって配布されてきたのであろう。われわれ研究者は直接・間接にツルティム先生から寄贈され、また仏教関係の大学や研究機関にも寄贈されている。しかし、中身は全てチベット語であるため、日本人の研究者がこれを繙くことは稀であつた。⁽²⁾ これらをチベット語で著作されたツルティム先生の意図は、チベット人の学生や研究者、知識人に日本の仏教学が積み上げてきた知見を広く紹介することにあつた。すなわち、われわれ日本人にとつてのツルティム先生とは全く別の姿で精力的に活動してこられたのである。ただ、日本で出版され流通ルートに乗らず入手が容易でなかつたので、海外のチベット人がこれらのチベット語の著書に接する機会はかなり制限を受けたであろうことは想像に難くない。⁽³⁾ それがこの度、四川民族出版社から10巻の全集としてまとめて刊行されたことによって、海外、特に中国内のチベット人にとつて日本の仏教学の成果に近づき易いものとなつたことは大変喜ばしいことである。⁽⁴⁾

評者も、チベット仏教学、とりわけツォンカパの研究を専門としているものとして、ツルティム先生がインド・チベット仏教学に関する大著をチベット語で次々と発表されてきた、そのお考えに共鳴するところがある。先生の意図は、近代的学問としての日本のインド仏教学・チベット仏教学の研究成果を、自民族であるチベット人に伝えたい、そしてチベット人自身が自国の文化としてのチベット仏教を世界的な水準で研究するようになってほしいということにあると思われる。

チベットの多くの僧院においては（本土においても、そしてとりわけインドの亡命社会に再建された僧院においても）仏教はインド以来の強固な伝統を維持し、今も変わることなくインドの仏教典籍と、それを伝承してきたチベット人高僧たちの解釈を聴聞し、理解し、身に付けて次世代に伝えていくという師資相承の流れが途切れることなく続いている。

各僧院では、数百人から数千人の僧侶が共同生活をして、厳密なカリキュラムの下に、これら仏教の知識を身に付け、最終的に博士号（ゲシエ）を取得するという、全寮制小中高大学院一貫の英才教育とでも言うべきものが行われている。こうして博士号を取得した僧侶の仏教に関する知識と理解は、われわれ現代の研究者がその足下にも及ばないほど広く深い。しかも知識としてだけでなく、その内容を自らの血肉とすべく修習が行われ、さらにはそれを支える菩提心のための実践的な修行も欠かすことはない。こうして知識と人格の両面において最も優れた人物が育てられている。

それでは、チベットの僧侶たちに知識の面でも人格的にも劣るわれわれ仏教研究者の存在意義は何であろうか。われわれは確かに「学問」一般の方法を学び（研鑽し）、十九世紀以来の多くの仏教学者が多角的な議論を積み重ねてきた研究成果を受け継ぎ、「客観的な」視点から仏教を分析し何らかの判断をしてきた。この近代仏教学の意義は、まづなによりも複数言語の資料を付き合わせ、文献学的な正確さを尊重し、さらに歴史的な観点から仏教の姿を解明することに⁽⁵⁾ある。チベットの僧院における仏教理解の伝統と、近代仏教学の伝統の間の境界線は、もしかしたらアメリカなどではやや曖昧かも知れないが、日本では、その二つの伝統は大きく切り離され、相互の対話はほとんどなされてこなかった。これらの架け橋になろうとしたのが、ツルティム先生の日本語の翻訳書群であると言える。ツルティム先生は若い頃には僧院において仏教の伝統を学び、来日してからは日本の仏教学の成果を学んでいた。その両者が融合したのが先生の翻訳書である。一方、チベットでは、近代仏教学を身に付けた研究者は数少なく、多くは僧院で伝わる仏教理解をベースにした研究をしている（その数も多くはない）。そのようなチベットの研究者に向けて、日本の仏教学の成果を伝えるべく、先生はチベット語で多くの著作を著されたのである。後に、大まかな目次を掲載するが、それを一瞥すれば先生がどれだけ広範に日本の仏教学を学んでこられたかが分かる。明治以降、とりわけ戦後のインド・チベット仏教についての日本仏教学の代表的な成果を網羅すると言ってもいいほどである。先生がこれに

よつてチベット人自身による近代的な仏教研究が行われるようになることを願っていることは明らかである。

もちろん、先生のご労作にも問題はあつた。チベット文献の和訳に関しては、共訳者の違いによつて日本語の訳文の質にばらつきがある。日本語だけではなく、共訳者が通曉していない分野、あるいは内容が難解な文献に関しては、通読に堪えない場合もある。しかし、それでも注記は概ね詳細であり、日本人だけでは採し出して来れないような文献にまで目を配っている、有意義な資料として評価できる。チベット語の理解に関してツルティム先生は伝統とこれまでの研鑽により、相当正確な理解を持つてゐるに違いないが、それを日本語に移すことの困難さは、同様にチベット語文献の翻訳を（ツルティム先生より遙かに少ない量ではあるが、多少とも）行つてきた評者には痛いほどよく分かる。その点にツルティム先生の責任はない。むしろ、われわれ日本のチベット学者が十分に協力してこなかつた点にこそ問題があり、また責任があつたと言ふべきであらう。

またチベット語での著作に関しては、先生の学習は時代的な制約から、現在の水準からすると少々古い研究が多く、最新の成果が盛り込まれていないのであるが、それももちろん原著の執筆年代が概ね一九八〇年代か一九九〇年代に集中していること、そしてツルティム先生自身の近代仏教の学習過程が反映していることなどの理由によるものであり、もしチベット人が同じように日本の仏教を学んでいくとしたら、やはり同じ道を通る必要があるという意味では、今でも十分有効なものであると言える。これを前提としてさらに最新の成果を見ていけばいいのであつて、最初から最新の研究成果の方を参照しても、それらの研究の歴史的な経緯を理解できないであらう。これらの著作が対象としているのは、チベット人でこれから仏教の研究をしていきたいと考えている学生や若い研究者である。それらの人にとって、ツルティム先生の全集は、全巻読破（『ラムリム』のテキストを除く）することが専門の研究者としての出発点になると言つてもいいであらう。⁽⁶⁾ 現在チベット本土の大学には、仏教を専門に研究したいという学生がたくさんいる（日本の比ではないのは羨ましい）。彼らにとつて現在、外国の仏教を知る一番の教材になるであらう。そ

してそれを越えて海外に留学する学生（欧米の言語、できれば日本語も身に付けてほしい。）が増えることを願っている。
チベット仏教の研究をチベット人自身が行える時代が来ることをツルティム先生とともに切に願っている。

以下に、ツルティム先生の全集の各巻のタイトルと、それぞれの章名を分かりやすく訳しておく。どれだけ広範な話題が論じられているかを知ることができるであろう。また、その後にチベット語文献をツルティム先生が共訳されたものの一覧を分類して掲載する（網羅しているかどうかは分からない）。これらは日本の仏教学に対するツルティム先生の大きな貢献である。

第一巻 『インドの論理学 (tshad ma rig pa) の思想学説 (lta grub) の展開過程 (phel rim) および論理学の歴史 (rgya gar gyi tshad ma rig pa'i lta grub 'phel rim dang tshad ma rig pa'i lo rgyus)』

＝ *The Developments of Logic and Epistemology in India, and the History of Logic and Epistemology*. 日藏仏教文化協会、二〇〇四。日藏仏教文化叢書、八。

第一章 デイグナーガ以前の非仏教徒の論理学

第二章 デイグナーガ以前の仏教徒の論理学

第三章 デイグナーガの推理論

第四章 デイグナーガ以降の非仏教徒論理学の展開

第五章 ダルマキールティの推理論

第六章 デイグナーガとダルマキールティの思想学説 (lta grub) の特徴

第七章 デイグナーガおよびダルマキールティの著作

第八章 ダルマキールティの注釈者たち (slob bryud)

第九章 論理学と内明が矛盾しないという伝統 (bka' srol)

第十章 現代の論理学研究者 (シチエルバツキーとフラウヴァルナー)

(以下チベット論理学の歴史)

サンプの論理学史

ナルタンの論理学史

サキヤ派の論理学史

プトン流とカギュー派の論理学史

ゲルク派の論理学史

第二卷 『瑜伽行派と中観派の思想字説の諸問題 (rnal 'byor spyod pa dang dbu ma pai lta grub dka' gnad phyogs bsdoms)』

「 Problems in the Philosophy of the Yogācāra and the Madhyamika Schools (deb dkar gsar mu). 西藏仏教文化協会、

一九九九。日藏仏教文化叢書、五。寿徳寺文庫、三三三。

第一章 三性説の展開過程

第二章 入無相方便

第三章 末那識とアーラヤ識説の展開過程

第四章 形象真実論と形象虚偽論

第五章 如来蔵思想の展開過程

第六章 乘についての学説の展開過程

第七章 自性の有無についての中観と唯識の根本的な (gzhi rtsa) 立場

第八章 二無我に基づいた前伝期の『中論』解釈

第九章 戯論と無戯論のあり方について

第十章 甚深なる縁起についての思想学説の展開過程

第三卷 『インド仏教密教の思想学説史 (rgya gar gyi nang pai gsang sngags kyi lta grub kyi chos 'byung)』

『 On the History of the Esoteric Buddhist Doctrine in India (deb ther byang gu). 西藏仏教文化協会 一九九四。日

藏仏教文化叢書、四。寿徳寺文庫、二八。

第一章 仏説が広まる以前のインド哲学

第二章 釈迦牟尼仏が行われたこと

第三章 特に涅槃のご様子

第四章 仏の教えの一般論

第五章 秘密真言の教えの特論

第一節 顕教と密教の違いと秘密真言の目的

第二節 秘密真言の思想学説の展開過程

第三節 ゲルク派の聖者流の灌頂と生起・究竟次第

第四節 タントラ概説

第四卷 『弥勒の法の再考察・了義未了義の美しい飾り (byams chos bskyar zhib drang nges mdzes rgyan)』
= *A Synthetic Study of the Treatises of Maitreyanātha Written in Memory of the Late Yongs-'dzin Khri-byang Rin-po-che*. New Delhi: Western Tibetan Cultural Association, 1984. 2nd Ed. 西藏仏教文化協会 二〇一一。日藏仏教文化叢書 一一。

第一章 弥勒の五法とは何か、およびその作者の特徴

第二章 特に『瑜伽師事論 (sa sde lnga)』の問題について

第三章 特に『大乘莊嚴經論』の問題について

第四章 特に『宝生論』の問題について

第五章 特に『現觀莊嚴論』の問題について

第六章 附論：縁起の問題について

第五(二)巻 『異生の凡夫に現れる様をありのままに著したインド仏教の思想学説の歴史・善説難解な要点の結び目を解く』 (tshur mthong skye bor snang tshul ma bcos lhug par bkod pai rgya gar gyi nang pai lta grub chos 'byung legs bshad dka' gnad mud 'grol)』上巻

= *On the History of the Buddhist Doctrine in India: The New Blue Annals*. Rev. Ed. 西藏仏教文化協会 二〇〇七。

日藏仏教文化叢書 九。

第一章 仏教以前のインド哲学

第二章 仏陀在世時のインド思想と仏陀の伝記について

第三章 (仏陀の) 十二の行いについて

第四章 初期仏教 (gna' rabs kyi nang chos) に ついて

第五章 声聞乗の仏教について

第六章 アビダルマについて

第七章 仏滅後 (chos rgyal mya ngan las 'das rjes) の仏教

第八章 大乘と小乗についての考察

第五(二)巻 『異生の凡夫に現れる様をありのままに著したインド仏教の思想学説の歴史・善説難解な要点の結び目々解へ (tshur mthong skye bor snang tshul ma bcos lhug par bkod pai rgya gar gyi nang pai lta grub chos 'byung legs bshad dka' gnad mdud 'grol)』 下巻

= *On the History of the Buddhist Doctrine in India: The New Blue Annals*. Rev. Ed. 西藏仏教文化協会、二〇〇七。

日藏仏教文化叢書、十。

第九章 依怙尊ナーガルジュナ出現以降の仏教

第十章 初期中観派

第十一章 中期大乘仏典

第十二章 初期仏教論理学

第十三章 聖典随順唯識派

第十四章 如来蔵思想

第十五章 中期・後期仏教論理学

第十六章 中期・後期中観派

第十七章 唯識形象眞実派と形象虚偽派

第十八章 秘密眞言

第六卷 『ジェ・ツォンカパのラムリム・チェンモの引用典拠を明らかにする太陽 (rje tsong kha pai lam rim chen moi lung khungs gsal byed nyi ma glegs barn dang po)』 第一卷

＝ *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment (lam rim chen moi)*. Vol. 1. 西藏仏教文化協会、二〇〇一。日蔵仏教文化叢書、六。寿徳寺文庫、三四。

(ラムリム・チェンモの本文に、出典の割註を入れたもの・上巻)

第七卷 『ジェ・ツォンカパのラムリム・チェンモの引用典拠を明らかにする太陽 (rje tsong kha pai lam rim chen moi lung khungs gsal byed nyi ma glegs barn gnyis pa)』 第二卷

＝ *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment (lam rim chen moi)*. Vol. 2. 西藏仏教文化協会、二〇〇四。日蔵仏教文化叢書、七。寿徳寺文庫、三八。

(ラムリム・チェンモの本文に、出典の割註を入れたもの・下巻)

第八卷 『ジェ・ツォンカパのラムリム・チュングの引用典拠を明らかにする満月 (rje tsong kha pai lam rim chung ngu'i lung khungs gsal byed zia nya)』

＝ 西藏仏教文化協会、二〇一二。日蔵仏教文化叢書、一三。

(ラムリム・チュンワの本文に、出典の割註を入れたもの)

「カダム派の歴史」

第九卷 『アビダルマの思想学説の展開過程および関連〔するテーマについて〕の考察・チムズーの美しい飾り

(chos mngon pai lta grub 'phel rim 'brel yod dang bcas pai dpyad zhib mchims mdzod mdzes rgyan)』

＝ *The Development of Thought in the Abhidharma Literature (deb ther ser po)*. 西藏仏教文化協会、一九九二。日蔵仏教文化叢書、三。

「アビダルマの見解と学説の展開過程および関連〔するテーマについて〕の考察」

第一章 アビダルマの起源

第二章 説一切有部の学説

第三章 パーリ仏教の心識説

第四章 原始仏教 (gdod mai nang chos) における善行 (bzang spyod)

第五章 経量部の思想学説

第六章 小論

「アビダルマコーシャに関連する諸問題」

「般若心経の短い注釈」

「日本仏教史要略」

「チベット語訳歎異抄」等

第十卷 『チベット史論攷・幻の鏡 (bod kyi lo rgyus dang dus rabs kyi mtha' dpyod 'phrul gyi me long)』

(対応する日藏仏教文化叢書は刊行されていない。)

「チベットの歴史と文化略説」

第一章 チベットの文化と慣習などの紹介

第二章 有名な翻訳師と彼らのご業績

第三章 チベット仏教史の文献紹介

第四章 ツォンカパ伝

第五章 チベット政治史略説

第六章 14人のダライラマ法王およびその摂政たち

「前伝期の仏教史および関連する諸問題」

第一章 主題

第二章 仏教伝播以前の歴史

第三章 前伝期五大寺建立次第

第四章 政教一致の体制が始まった次第

第五章 ティソンデツェンの三人の息子たちの伝記

第六章 テイレルパチェンの伝記

第七章 ランダルマ王の時代

第八章 後伝期最初の二人の王

第九章 三十頌・性入法の時代についての考察

第十章 朝鮮の金和尚とチベット仏教

第十一章 「試みの六人」についての考察

第十二章 サムイェの討論についての考察

第十三章 十六条憲法についての考察

以下にツルティム先生の関わった和訳・注釈研究を整理しておきたい。まず、『ツオンカバ中観哲学の研究』というシリーズにまとめられているツオンカバを中心とする初期ゲルク派の中観思想の基本文献の和訳が挙げられる。同様なシリーズとして『チベット密教資料翻訳シリーズ』がある。ただしこのシリーズにはツオンカバや初期ゲルク派の文献だけではなく、後代の教科書も含まれる。その他シリーズに含まれないツオンカバの著作の翻訳を顕教と密教に分けて挙げる。そのうち特にシリーズにはなっていないが、ツオンカバの『菩提道次第大論』の訳注研究はもともとまとまった分量の業績と言える。ツオンカバではないが、タルマリンチェンの『プラマーナ・ヴァールティカ』注釈の訳注も4巻からなる労作である。その他、カギユ派の祖の一人ガンポバの『解脱の宝飾』やツオンカバがナローの六法を自らの密教思想の観点から解釈した『三信具足』など、重要な文献が訳出されている。⁽⁸⁾

ツオンカバ中観哲学の研究

『菩提道次第論・中篇…観の章 和訳』ツルティム・ケサン、高田順仁訳。文栄堂書店、一九九六。ツオンカバ中観哲学の研究、一。

『レクシェーニンポ…中観章 和訳』片野道雄、ツルティム・ケサン訳。文栄堂書店、一九九八。ツオンカバ中観哲学の研究、二。

『深遠な空性の真実を明らかにする論書…幸いなる者の開眼（千薬大論）（トウントウンチェンモ）』ケードウブ・ゲ

ルク・ペルサンボ著…ツルティム・ケサン、藤仲孝司共訳。文栄堂書店、二〇〇一—二〇〇三。ツォンカパ
中観哲学の研究、三—四。

『入中論の意趣善明の鏡』ダライ・ラマ一世ゲンドウンドウプ著…ツルティム・ケサン、藤仲孝司共訳。文栄堂
書店、二〇〇二。ツォンカパ中観哲学の研究、五。

『タルマリンチェン著』入菩薩行論の釈論・仏子渡岸』第八章・第九章の和訳研究』タルマリンチェン著…ツル
ティム・ケサン、櫻井智浩訳。人間文化研究機構総合地球環境学研究所、二〇〇九。ツォンカパ中観哲学の
研究、六。

チベット密教資料翻訳シリーズ

『大秘密四タントラ概論…チベット密教入門』ガワン・バルデン著…北村太道、ツルティム・ケサン訳。永田文
昌堂、一九九四。チベット密教資料翻訳シリーズ、一。

『吉祥秘密集会成就法清浄瑜伽次第…チベット密教実践入門』ツォンカパ著…北村太道、ツルティム・ケサン訳。
永田文昌堂、一九九五。チベット密教資料翻訳シリーズ、二。

『秘密集会安立次第論註釈…チベット密教の真髄』ツォンカパ著…北村太道、ツルティム・ケサン訳。永田文昌
堂、二〇〇〇。チベット密教資料翻訳シリーズ、三。

『無上瑜伽タントラ概説…秘密道次第大論上』ツォンカパ著…北村太道、ツルティム・ケサン訳。永田文昌堂、
二〇一二。チベット密教資料翻訳シリーズ、四。

『菩提道次第大論』 訳註研究

『仏教瑜伽行思想の研究』（ラムリム・チェンモ）止の章』 ツォンカパ著・ツルティム・ケサン、小谷信千代訳。文栄堂書店、一九九一。

『菩提道次第大論の研究』 ツォンカパ著・ツルティム・ケサン、藤仲孝司共訳。文栄堂、二〇〇五。（『ラムリム・チェンモ』の冒頭から小士と共通した道、中士と共通した道までの翻訳研究）

『菩提道次第大論の研究Ⅱ』 ツォンカパ著・ツルティム・ケサン、藤仲孝司共訳。UNIO、二〇一四。（『ラムリム・チェンモ』の道士の道の止の章までの翻訳研究）

『菩提道次第大論の研究Ⅲ』 ツォンカパ著・ツルティム・ケサン、藤仲孝司共訳。UNIO、二〇一七。（『ラムリム・チェンモ』の道士の道の観の章までの翻訳研究）

他のツォンカパ著作の訳註研究

『アーラヤ識とマナ識の研究・クンシ・カンテル』 ツォンカパ著・ツルティム・ケサン、小谷信千代訳。文栄堂、一九八六。

『悟りへの階梯…チベット仏教の原典菩提道次第〔小〕論』 ツォンカパ著・ツルティム・ケサン、藤仲孝司訳。UNIO、二〇〇五。

『チベットの密教ヨーガ…深い道であるナーローの六法の点から導く次第・三信具足』 ツォンカパ著・ツルティム・ケサン、山田哲也共訳。文栄堂書店、一九九九。

チベット仏教論理学・認識論の研究

『ダルマキールティ著「量評釈」とタルマリンチェン著「同釈論解脱道作明」の和訳研究』ツルティム・ケサン、藤仲孝司訳。四巻。人間文化研究機構・総合地球環境学研究所、二〇一〇—二〇一三。チベット仏教論理学・認識論の研究、一—四。

二〇一四年刊・四川民族出版社（成都）

注

- (1) この賞以後にも、ツルティム先生の翻訳活動は続けられ、ツォンカバを中心とするゲルク派の基本文献が日本語で読めるようになった。後掲のリスト参照。
- (2) ただし、『ラムリム・チェンモ』および『ラムリム・チュンワ』の典拠情報を詳細に割註に記入した校訂テキストは、われわれも従来から利用させていただいてきた。
- (3) 余談であるが、評者は『ラムリム・チェンモ』の引用出典を注記したテキストの上巻を偶々所持していなかった。ある年、授業で『ラムリム・チェンモ』を最初から読むことになり、ツルティム先生の校訂本を参照したいと考えたが、もう刊行から十五年ほど経っていたので、ネット上でそれを入手する術はなかった。その巻は、京都の西蔵仏教文化協会が刊行元ではあったが、実際の印刷は寿徳寺という寺院で行われたものであった。そこで寿徳寺の連絡先を探し出し、直接電話をかけて在庫がないかどうか問い合わせた。すると、倉庫に在庫が残っているとのこと、送料負担だけで分けてもらえた。流通にのっていない出版物がこうして知られないままに倉庫に眠っていることはたくさんある。これも余談になるが評者が東洋文庫から刊行した『西蔵仏教基本文献』全6巻もまだ評者の手元に大量に在庫が残っている。ただこちらは『ラムリム・チェンモ』ほどの需要はないようである。
- (4) ツルティム先生は、全集刊行後も日蔵仏教文化叢書として第一四巻『チベット古代史研究撰集…雪国の十万の光』二〇一

四、第一五卷『チベット大蔵經における重要な仏教思想の選集』二〇一五、第一六、一七卷『チベット訳カンギル・テングルの偉大なる母であるチム・ジャンピーヤンの著書『チムゼー』の典拠を示す日月』二〇一六―二〇一七を刊行している。もちろん、いずれもチベット語であるが、本全集には含まれていない。

(5) この問題を追及するには、この書評は適切な場ではないので、とりあえず大方の賛同を得られるであろう普遍的な考え方を記している。

(6) もちろん、それは時間的に無理なことであろうから、自分の専門とする分野から少しずつ範囲を広げていくのが現実的である。

(7) ただし、チベット論理学の日本語への移植が難しいこと、そして何よりもチベット論理学についての系統的な知識が(藤仲氏の側に)不足していることなどの理由で、他のラムリムや中観の訳書に比べて、翻訳は信頼のおけるものとはなっていない。

(8) これらのテキストの大部分には、英訳がすでにあることを付記しておきたい。ただしそれらの英訳は、注記が少なく、訳も意識であることが多い(『菩提道次第大論』の英訳自体は意識ながら信頼できる。)